



3869
26



筆力士

利 9
3869
26

3869
26

特 9
3869
26

9 翻へ
3869
26

序

大正八年四月十日寄
氏贈

序の十六
序の十六
序の十六

あまのほろむ 杜若とくろむ 五文

字は折句ともるこし 蓋雑詠の

松子句め文字ハ其枝川 乃

流の末は小網よ 咲るサ降小

心し〜と風流此意アニ 雙
何らんや既此好士ア 予がア
屋よはアひくア秋の草ア用カ
せんア詞也ア兵者ア東西ア分アを
ふにア風とアあらア土俵乃
殺アの十六評とア濫アるア然ア而ア

是と筆力士とア飄物アなり
流行とアゆアゆア並ア地取の
力アもアもアあらアもアのアと
星運堂ア此ア梓アとア轉アとア世小
心アもアもアもアのア志アのアるア

巳の季秋

世萬
自著

黄金咲也

つゆまのさき

振りよ

位萬



多由菴

初日 白うね下大よ三丁 多由菴

鶺鴒慶



是夜よいそ人を何れも小傾壇
榎井を又浅の鏡

旅没者日限りよびうを燕とて

七夕の一夜経し今年升

大黒の穉き穉き居る子も室

立く揚枝を又よ放すぬ襦袢也

立くハ袖引伸じし此小踏立

誰う弾う豆の田圃に琴此音

白か子

首

禁

子雀

本下

鳥口

ハコヤキ

龍池

ウダカハ

千花

本下

白口

三鱗

一 遊 迎 ぎ 店 子 た や す ね 胡 椒 粒 大川 信 丈
 一 大 名 の 舟 乃 一 百 三 十 古 錢 賣 ハ丁ホリ 玉 丸
 一 寄 へ ね ね 吳 尼 々 牙 氷 水 ギンナ 久 丸
 一 俵 ころ 以 之 友 の 板 此 小 傾 塚 カンタ 岩 井
 一 内 音 隠 と 杖 一 川 夕 鐘 係 ハ丁ホリ 竹 光
 一 鍾 の 中 一 片 切 心 胸 ぐ ぐ アサキナ 八 義
 一 恨 一 云 一 釣 河 け 了 蚊 家 一 元 茶
 一 浮 垂 一 派 と 作 了 尾 古 馬 錦
 一 賣 場 一 坑 と 連 了 小 系 女 下谷 橋 住
 一 産 声 早 ぶ 片 ぐ る 在 不 管 裏

日 初 白 加 祢 丁 大 よ 二 丁 未 醒 菴 嘯 一

一 既 死 一 一 府 の 母 房 此 燒 場 へ 廿 八 孫 白カネ 鷄 羹
 一 六 道 淺 と 一 斤 了 頭 一 吾 牛 四日本
 一 橋 一 痛 一 里 ヤ ア 志 め 一 一 干 花 アサキナ
 一 三 抽 の 小 一 りを 梅 足 じ じ 一 元 茶 白カネ
 一 一 一 九 ま ぶ の 崎 一 ア せ 仕 一 不 存 カンタ
 一 一 分 違 ぶ 茶 袖 と 後 一 一 翠 堂
 一 一 困 女 が 産 止 井 戸 銀 と 川 込 一 三 鱗 エヒキ
 一 一 産 の 産 中 へ 右 鼓 と ぶ ち 込 一 一 老 蝶

神カミなカミ引日と帳尻りえ出され
 借りの有る方々吹ッッけ
 飯斗り焚く釜の蓋とりひ
 えまつる目々目々目々目々
 杏葉の目々目々目々目々
 黒々々々鏡子下母が車り
 了麻がけろ麻ニ客がなドミ
 流れる蓬戸と橋々ねどり
 そこの餅針とで橋々
 河上まの白いね火鉢で煮り
 本下 五喜
 コヒキ下 盤車
 白カ子下 禁之
 三川下 白記
 石龜
 千雀
 小舟 酒肴
 首々
 花
 竹光

目二
 芝口三丁目
 洋花菴
 寛々

冬フタタも日向子爰ち此蠅た々々
 武士ハ武士にけはてまもをき帯
 普化儀の尺八と家内此遠が游イ
 冬の秋田子二三稀妻えへ
 踏書ぐ罽相へ伸ヌ母此様
 ぶり付くたいむ袖々茶袖出々
 多売を樽森入り此鼻乃穴
 振袖の猿の登赤子元々
 下谷 李子什
 糸ハシ 田民
 千雀
 八五下 菊丸
 八我
 三鱗
 白カ子下 丹房
 小松川 雲助

不二素乳子雲彩婦也乳尼せく 菅妻
更婦しそ歌入夜文此 糸車 ヨシト 布笑
富士ニツ高田の馬場此喜本保 アサカサ 柳馬
舟密の袂より出る橋 大工 升光
あゝりそたいむ産志此宿報 田下 徳栄
あゝりの舟よるうー母此等 升光
舟の酒舩とくくめく八分目 石糸
懐く樂しむ多此乳さるり 佳栄
舩売くたそよ伴舟が張あけく 鳥口

冬野原暮一声のをげーく アサカサ 美珠
振向い季既へてうごんしき豆 大サカサ 天甫
文ら夜子たしなむきこ後立く 千花
疾子玉より佐此揚美妃 美珠
きあふとし候とをあせら 教 首く
利き酒ここれくそ季既 三 三隣
笑れく尾が肘をえら香 酔 酔帆
銀河の下子教此小 靱 ハナホリ 荷風
客の舟織く肘結子仍く 千雀

雅子帰おしく時とく松 ハナホリ 蓼虫
 木の芽ふくは湯治場此株 玉丸
 ましごころどる時ハ 庵おん 樽住
 板衣なく 厚徳へ伽 コクイ 禁三
 灸点の透通る 藍さび ネハシ 清我
 音根とくへ通ス 錦木 白カキ 柳糸
 竹まよ東小字とごりヤトを此平ラ 泰宗
 客より先きへ戻菰子碎小新帰 布笑

二日 石丁三日 松考堂 藤々

の
 是く内でも四番をん子志
 二十七度と松ととごり 白記
 口とす程十畠と耕し 吾竹
 産既子目鼻と付く帰し 在を據
 河原の是考サと妻子説り 三籾
 虫平の河草と毛坊へ納メ ノカ川 羊籠
 東夷南蠻子青田と詠十 曲下 後隆
 八節の名衣裾く 解く 立孝

一 柳や楊もこまき い 八五下 魚好
 のりこ神日此戸柏と 出 昔く
 大取より取たりと 勅 扉本
 萬葉ぐ飯もたにくもの三詠 日下全 清承
 七たの三 四 尋子 下 た くれ 日下全 其徳
 困 日下全 方がぬ 日下全 づる 日下全 引導 日下全 不存
 言 日下全 砂の下 日下全 へ 日下全 網を拵 日下全 け金
 ず 日下全 り 日下全 茶売 日下全 を 日下全 あ 日下全 ひ 日下全 ん 日下全 ち 日下全 は 日下全 つ 日下全 け
 田 日下全 今 日下全 殊 日下全 や 日下全 を 日下全 進 日下全 れ 日下全 が 日下全 積 日下全 ま 日下全 翠重
 更 日下全 流 日下全 と 日下全 近 日下全 江 日下全 の 日下全 そ 日下全 の 日下全 首 日下全 ね 日下全 え 日下全 馬行

三 鞠町平川丁 漣 瀧 菴 東 水

杖木の下 日下全 ち 日下全 め 日下全 く 日下全 多 日下全 子 日下全 木 日下全 場 日下全 此 日下全 月 日下全 千雀
 猿 日下全 楽 日下全 注 日下全 め 日下全 子 日下全 先 日下全 流 日下全 霧 日下全 此 日下全 中 日下全 昔く
 疑 日下全 の 日下全 疑 日下全 結 日下全 此 日下全 文 日下全 布 日下全 へ 日下全 切 日下全 付 日下全 子 日下全 け 日下全 佳系
 女 日下全 花 日下全 が 日下全 作 日下全 匠 日下全 走 日下全 く 日下全 ち 日下全 幸 日下全 ハ 日下全 杖 日下全 ナ 日下全 廿キ
 酒 日下全 止 日下全 め 日下全 死 日下全 ん 日下全 じ 日下全 子 日下全 ち 日下全 ち 日下全 銀 日下全 世 日下全 界 日下全 龜吏
 酒 日下全 く 日下全 討 日下全 死 日下全 己 日下全 幸 日下全 流 日下全 う 日下全 ま 日下全 つ 日下全 い 日下全 へ 日下全 蓮丸
 子 日下全 七 日下全 女 日下全 の 日下全 庄 日下全 や 日下全 子 日下全 花 日下全 々 日下全 矣 日下全 此 日下全 蓋 日下全 氷里
 山 日下全 茶 日下全 茶 日下全 へ 日下全 帝 日下全 布 日下全 の 日下全 油 日下全 内 日下全 樹 日下全 や 日下全 怨 日下全 苦 詠

さ母一髪障子へ籠の鬼母えへく
実盛へ彩道がえせり矣こらめ
沙汰はし子死人茶嘆く業此者
傍のえく呵る下級此瓶罍
霸王樹へ志むる侍場ませり筒
横嘆く下々子羨へ五ッ銀茶瓶
涙立つく鴨たむるそ岸の浪
山賊も愁考る夜半を浪世界
既遠西りし流系西りし京花母

荷風
雲助
宗井
徳深
馬錦
茶袋
千花
大鐘

後浩メ 祈きくろを修し塚 昔し
不飯そえくむこや生 焚 禁三
古城さこくく籠 此 声 アサシカ 茶粹
古逢子交る村此積全 口口
瓶狸の踊ハ此住ち此椽 急流
以士の繪ろ子算三飯 蟀 本下 整房
瓶狸り亡者り墓下子燃る火 後隆
小精ろある算此 謠 古 以全
声とあるが婦 奥 此 自 既

一 年房 崎 へ 子 む せ ず 新 務 柳 系
 患 の う ち に 武 藏 也 へ 鯉 田 氏
 混 布 巻 の ほ び お く 作 小 崎
 こ ぞ つ く 弟 小 崎 此 鼻 筋 八 茂
 子 佐 せ ま び く 村 十 錦 本 天 甫
 子 佐 を い 進 小 泉 下 し 此 貌 烏 曉
 功 者 子 妻 の 誇 小 町 風 雲 助
 こ ぞ 一 眺 此 子 妻 小 崎 升 光
 衣 加 一 一 寺 務 務 寺 岩 井

三 日 本 一 通 ぎ 丁 松 清 菴 亭
 目 一 日 本 一 通 ぎ 丁 松 清 菴 亭

八 天 物
 針 の 縫 ひ を 粘 く 川 付 昔 一
 見 の 時 子 だ ぞ 取 此 内 あり 羊 籠
 一 口 心 の 酒 子 也 子 れ 去 中
 寄 寄 子 一 ぞ ん 子 汲 万 宗
 中 為 を も 捨 流 一 に つ り い 不 飛
 望 小 親 父 の 仕 務 逢 小 千 雀
 夕 川 客 の 羊 籠 へ 蠅 を 入 れ ぐ り つ 子 坊
 此 逆 父 子 日 傘 を ほ め り 法 家

又下のちもすしいく若也 其房
 谷へゆきこゆきと紫わー 不存
 秤の尻ををねより巻より 白化
 茶谷の下に此湖子も合セ 八我
 母もををふりつゝ海 三鱗
 誰が獲たか志なんーたへ 其房
 此彩道続ハ焼もを焚たまへ 其房
 納小鶴が額堂の居つつけ 其房
 土権のまよふ松へ来く藤 其房
 江のが治しを何たり付く就い 其房

目四 白浪下大よこ丁 泰宗 吾民

不草子恨の癖をふりり若く 其房
 子連子愛身を酒の石養生 田氏
 歌に帯る浮世の果を多餅子 湯堂
 制れを移よよこさるる身毒不 大陸
 子日へうわれ鳥の二人り連連 千雀
 施餘息も浮世へ逃く身信りく 田宗
 蝉啼く掛山何れ夜 臨中
 施坊出入肉子交離子二人り逃 萬葉

節季のこ愛傾城此張 夕トエロ 一口
 三樓へ梅えの栲牙此ニ公 鳥口
 不草へうの向く櫛の斑を巻く 三鱗
 冥取の内此厨へ二をにし 帆
 関元の腕子似合ぬ笛上白 衆文
 吾強め梅へ伸居れがう忽く 禁三
 哲文を喧ませぬ事此障衣来く ハトホリ 父芝
 せくまのうかき子を切る事此朝 首し
 旅此畏懐るしろの風をん 本不 季子伯
 正客へうぬ喧へさぬ此禮構 小松川 風車

席ののりしろに本筆府此掛地 玉丸
 脊戸より此梅白小日富士 八五ノ 相丸
 積れあふくえ基此 古 清象
 釣柳を消く 互ナ等 馬蹄
 竹うを待ナ く毛をまう 雲仙
 改巾もあそし 通俗此 蓋 下谷 五緒
 つひ尖ををる傾城も 鄙 若孫
 隈もあ智子下山 さる 兎 寸寄
 赤袖つけと下杯す る 燈 千産

積る者路を春に 酒貫イ 休光
 窓のもろくお料に麻糸 田氏
 杖より枝よるんぎや 此妻 比令
 連れの又浮もを朝に大宮 中丁 立孝
 雀とま井へ献上此旅 菅裏
 つらめを消へる傾城の乳 永里
 活ひ尼の懺悔しとま此日 鳥暁
 まゝ来く細尼に独折道 石飛
 付本焚切るりよ小此海と妻 阿摩文

四日 本丁々丁め 整房 立章

秘の 笑母の思はきく阿そい 昔竹
 軸の通へ切く 送る 三鱗
 濡手掛の小玄と浅黄に 中橋
 酒やの戸を踐く抑ま 八我
 春衣の来る日、懸抜く焚 白日子 翠香
 口へ掛ると指ぬきとをぬく出 友 其友
 王子の庭下汁おろす振おし 八三廿 茂友

川の名を純子へ入る源 毎ハコナキ紫曉

分学こいちと新道の破うさく 氣ま

何籍もあり稿受もつれすつとく 李什

改差り大と基三がきよ藤柄壳 清彦

風きる茶やぐ麻札子石 箱 円宏

字風地瓦のぬめくすつを走曲了紅

うつふりさけりるれ満のすより石 田氏

葉山子すかのかたむすれ社 日比谷

川舟の地どかへけきく裾りく 石氣

紋とくしてハちりりのゆさく津基 父芝

彌杖よりちる店の禰ええく 永里

川柄りと地ままねく踏田の寮 八我

学柄けりち寺ハ住何れく 田氏

也く柄も痛くさい中か せうろ

ちりとりけく居くれを中か 荻表

柁本も鉢へいさは好く殿 翠毛

曼茶羅丸の房写へ付く女 大鐘

柁本も手法り入れく約母 石氣

丸飾が似合つくとハ 後藤

松戸の君此糸と標く玉
 了蠶の中此糸子梅う香
 松の因弾く隠居不此琴
 木それなり子居猪も十音
 了士の疾声よいさむゆ旅
 松を此と店此省札
 待衣の障と高地思くま
 まじりの指く痛く汁馬志
 清てハ再露と居續けれ香
 玉丸
 永里
 千花
 桐丸
 了花
 檜住
 日比谷
 五緒
 雪帆

目五

つつはう丁

空舟巻

廿十捕

舌のナキ...あま子也
 身のはね...
 糸...
 黒と...
 隣りへ...
 お歌...
 を...
 生...

翠を
 白純
 土得
 瓢芭
 田瓦
 若竹
 柳枝
 白純

子たあさくまうれさせぬハナウメ
 陀多さんぬたうん
 何うするをよめいさし
 何ろと鼻をよまんくえたか
 誇り娘をあしき
 大座ハカ 侍強りな子
 汁や菜く海産を一つめ
 母ハ竹の子に付てられ
 多きハ
 ふところと切るおろりとまめ
 共牛

トシヨリ
千花
白化
共牛
手勤
禁三
警帆
花川

肩やの採れ速りまづみ
 粥も柄杓く盛る積すみ
 省の鏡は菱を川あし
 正西も孔雀ごりませ
 ニを子なる以芝の風を吹せ
 うりつ了後へハすへび子ハナホリ
 指の移子あゆやくあし
 藤敷四堂へ故を荷を北し
 筆斗り吐文巻をひりへ
 千花

翠き
母房
百重
系家
馬海
東橋
千花
那候
千花

なりく申かまえるもらづれ 白か子下 手友
 帽子く穿る道そねまれあせ 整房
 廁の礼を口えりよのべさせ 寸步
 彩川のおちアセひりま 手糸
 凍しきしよ下しきり 三鱗
 ちつこいづ泊るをへ 去牛
 一家おぶちのめー 万花
 吹陣りのやよふへちど 柳糸
 大家のうゝあれたる世う似合 不存

目六
 りめい丁
 田舎菴
 完我

舟橋作の味撥子紙帳辨一 澤手帆
 舟屋下母の紙れ程進日 せうろ
 又益な階子と櫓る彰二階 サクラ 深花
 的場進流る漆畑を仕高く 其房
 原と板ハ後と暮盤下小松川之味入 桂柳
 建鷗んがむ白某一ろい指 清象
 弓が板々々味の前れ初れぬく 日比若
 えいこ羽織ぬがせる思ふ事足ぬ 夕芝

麦ニツゐる花牙子子喰キ 龜文
 文珠も知るぬ智恵く遊ふ魚 荻妻
 探らんちゆく十三里嫁 糸子
 門折子村の智恵を集る 〃
 探る返るゆき茶母じを張る 翠子
 藻へ鳥羽玉の迫ひ女士 玄劍
 もたれ橋子へ橋狭く 味 鳥曉
 十八

六日 京橋方田中 逆舟菴 對雨

系舟の葉ふも若此やが 三鱗
 うハボウ里ところ一葉たるハ 若し
 根の斑け透く舟花子足透 三鱗
 掛子あせも掛を取つく末 千花
 雪子文一あ鷺子笑一 了り
 いつ眼が笑んくも吸付く也 せろろ
 漆木もたあやがあま、海かセ 繁房
 河波やくまうる田植り 漆り 馬蹄

二階中子坐テしとをぬきれ 後隨
 砂やの度敷を志んとさせ 升克
 板へもむ獲籠りとと 白記
 流の流へ赤 籠とひや 那族
 言の符る子随つゝ解々 石靈
 トツトと掛も白ふなるぞや アサナカ 了鹿
 六うとまのどんそこひや 十住 其依
 羽鳥帽子をか松戸うひくま 松波
 華木子積んと著籠くもね 葉丸
 隣く怪事をと仕く幸りたり

忠のそまぶごりり 山君
 仕 仕 無 無 一 一 姑の幸子入り 元恭
 美翁勝の中子と人儀を仕 ハナチ 末端
 胃の何ふは豆格子とうたせ 昔牛
 踏ぬ年の藩巻も聴 井房
 黒梅を錫く 衆子
 こいつが作りと喚くひはた 二毛
 蕨の地りも油搦く ハ
 赤麩も蕨をぬく 搦び 那族

雲がらけ+壁をふち抜キ 斗伽
 今くかぶの八部を苦き 苦く
 洞の晴るへ生果る宗り也 森得
 娘が二依ふんまへく 居 清家
 皺より専たこを痛くかり 田氏
 二世の縁を一世をりし 廿可
 本口の・沙りく末社も建く 石氣
 ころさんちやんと四近取松せ 不存
 袂のふを母う九り場ヶ 左勇

目下 新我木下 井双庵 笑魯

信く連る子母のさちく 瑞堂
 幸子と弟小母もけつうよ 若牛
 楽や一齋おをこよ 梅小 千菴
 かり豆へまひる露う振差 馨帆
 門遠ひくをつうい土万 徳栄
 免が掃へを福る 大通 井光
 葉ゆ子の弦れをねる 風 大澄
 蓮さい月れく鼻をうむ母 〆

門子毒れと母の鳴る声
 笑帳伝子神はくまき
 何毒の血一途入る白糸
 帳裏を潜つくもあそ乳来り
 風子浪うら萩ちの途
 うま立くく信つ茶嫁此歌
 迦陵歌かて婚の痛る
 能と云下凡日子母ハ又
 がやりみおね一後立チの重
 歩めく帰る母の温泉土産

無名
 葉丸
 無名
 葉房
 伝丈
 夕芝
 葉丸
 後隨
 葉丸
 白口

又か

吸付子免の通ふ化粧了
 素引くくく歌くたをこの桐吹く
 襦ろ子通お計う下駄の音
 疎基うくく延用此桐り立チ
 能と云下凡日子母ハ又
 がやりみおね一後立チの重
 歩めく帰る母の温泉土産

葉房
 一力々
 葉丸
 五經
 後隨
 内宗
 大薩
 田氏
 大薩

すり透りしあし圍うけのまほま
栲躰へごりり〜そそ日のこ
祐成とあや〜ゆけけふ板
美声うりり〜と振ふ下弦の音
涼〜かろ帰る藤子れ下弦子音
笠屋甚うけ〜と借入藤子れ
祝作のがり〜海を割る 春
砂あつ〜滝瀧の庭へ下弦備り
栲躰子歌も呉城の誓古本
祝へハ場〜と華ふ化粧水

徳栄
昔く
千花
海堂
鳥曉
澹窓
伝文
響帆
禁三
為若

目七

セこもの丁

陶隣

文規

^白の連ひが毎日よありゆも
矢イがそろるぬと栲打へ迫まれ
孝を重くの裾の垂が女果
以用と上り付てく下さへ
焼やう子切つ〜下々うえ
祝方益きたつとモキつさへ
蕙を弱す訂を頼みれ
おめへの瘦ハ月あア福へり

松波
千花
為し
元春
其友
未如
翠香
三鱗

桐を仕ゆふを較りまじり
 斤付くふハ仕立やくヲツス
 小町よ似しの子湊人ニ頼れ
 麻島の母己の要ふたのまれ
 因是ちめを費つてま
 姑の何つけは坐テモウのひ
 坊々土佐坊子川五くらぬ
 つつねへ彫おゆつてつらぬ
 且那チマアト一声ハあげ
 玄イ子くそつちな万イが是

下ナナナ
 小金
 末端
 石糸
 彫族
 昔く
 丹を
ウタ川
 蓮子
 桐丸
 百壹
 三鱗

壹ヤのまへうう斤油ぬら
 像子風ガカマウのく 4ぶ
 たの〜
 中ア喜え器の辛子漬ガ何あれ
 柳も母の父イたけの釣くせ
 あらねハ是えをされぬ海り
 苦子そつち子草へ仕置イ
 醬油樽の一両科を九り
 蔦ノ類ワるるを志あつて起

白地
 瓢箪
 不糸
 昔午
 三鱗
 〃
 蓮子
 せうろ

手あしすきさう苦方くごさう
 心の肉くこ八をこごり
 こんよもきさつ春つー
 つむれの親が端を侍子
 芋糸の家の祝を借り
 そゆくゆ家の磨がひよま
 ぬくぬきうよ何をさうりあ
 紅葉さんも木枕うえ
 垣根子育つ炭五りを詠メ

丹毛 森得 菊糸 兼子 幸友 流家 瓢道 百蓮 彫淚

同 京えー聖子 秋巻者 東々

谷くの梅は多系に 懸泊り
 結ひ髪すこー目尻を引上々
 ゆ吹よるサの泣く 顔えせく
 柳湯く植本と祝く教も茶
 ゆ吹やサ合ぬを借りに茶
 世帯ト派もよまの道め 信
 高祈禱の内に波立ち路 屠
 ゆこしられたる通解々笑れ 経ひ

兼房 首人 茶弘 其房 天甫 五緒 鳥曉 信宗

紫の茎子跡る 比 翼 塚 永里

梅好けハすくこく母のト昔号 依夫

梅枝ヤグじろえセ命ハ誓のち来 了紅

石巻らるこ客一めん 音 元恭

夜来風馬も馬ちれや号此声 翁徳

笑所の音にまつこまの近 後隆

菽ハりのたままきよ来る鏡麻石 田子

病阿がぬ腕とくべる 鱧あー 鴨帆

菽馬志の逢ハ天車の皮を盛り 無名

鱧おも字跡の山道と号にま 荻妻

村のあなろく形をふ言祈ん 忌 禁三

山姥を御ゆる若のあめをぶー 岩井

浅まろまされる切銀治此 負 一口

麦二三寸者徳の 人 通り 於池

春を抑く子の猿をつろぬく 岩粹

梅枝ヤの匂此目を切る窟の下々 相丸

裾下の所城を号せる帯袴 田子

先妻の子れきうこのな 塙 梅住

牽り羽子のあひハ音ぬく 鱧り松 鳥口

・ 麦めーと板の立本に鄙長保 白カ子下 三甚

伯々のすなとに毒れ梅子拔 萬来

胸をらにすかす恨まひよ己手 け口

此利あひと脚る肉攸も一穴 燕子

此利あひと教書あへ通へ腕 杖 寒暄

脊中かへさけとまする 尺八 原系

体日のまひ鼻工の土器 時 大陸

脊中かへと搦へまめるぬき 板 翠子

むき身籍ハ不達あな籠れ借所 李什

虫まま素んも望スハ區居 七ろ 共

ふふふサたてるの詩 桜く 翠子

輝に戸とさへ一面はゆく 春 未記

馬の二大一橋へる向めまま在中 葉石

目八 せこもの下 陶居 十寸尾

かんと森ハ隣のさーまへ這いゆこ 不已

射るさーせる踏もあま 翠子

猫に喰せる天窓にあまり 吾辰

述人の彩道やーヶせ 登る

植田く口と志めー 笑ひ 明之

ヨリツ喫カシク
 遠くも兄と対面
 既のやうな色は
 裡の枝室へ礼に
 今更の派をあら
 猪原刀く切られ
 先生へ通つて
 浪の揚る枝はし
 七十五夜は
 地蔵のやつさ
 百室
 千層
 田所
 藤原
 平志
 不已
 明之
 喜子
 付通

平傳島子控サセ
 登の下れ古れを
 月々々々々々々
 灰ハ一御直
 春めくくく白
 櫓や洞十二百
 大工の葉は
 構へ切つて
 ちのあかしの
 狂然するほど
 百室
 千層
 田所
 藤原
 平志
 不已
 明之
 喜子
 付通

祇省の暇此盤を宿一
 廊下此言を長鋤う掃海メ
 間子ハ少身呈もあつたを
 姉さんこたまりて居さん
 帰羊の香炎に造れ
 着丸乃引尋を引
 大下早苗を焼く何れ交くアキ
 館の日はしハ毎本ひらげ
 将そつあ字斗り知れらあ
 子安藤へそつひ付キ

三ッカラ
 白地
 昔し
 千茶
 之素
 近隣
 不及
 爲翁
 千花
 葉

隣りの亭主一悔をまゝいふキ
 のつりらりくこほり宿れ
 新の甲に大小だむね
 光つて日ハ流者も賣切し
 陶の尻くあつたなごり
 沈ひ髪違子居縁をかこめ
 漆くこひつりしたりよ
 傳西扁照、莖をまうすみ

三甚
 彫旅
 蓮子
 千花
 千花
 せうろ
 海隠
 二色

陶土二 役 鞠 八 茶茂

河やかり物やや漢とあら板 延途

焼香くの上へ座敷と約し 不存

町役人よりほうろく賣り付々 小川

淡成鏡とぶんぬまやれ 土侍

活きの酒源が吞せりしと 登く

今日のお座へ梅あまふあ 小成

廿九

日本はく老因丁 九丈庵 竹二萬

けしほむのねえにあてる焼きせり 八義

あつたまのかりぬる焼く火伸し森 百靈

まうけらまの尾久を流るゝあては灰 大滝

競るえにうらまふおやまは推集漆 正馬

恨ふまきく教く湯屋よはすまきく 茶坊

毒取の肉にえや笑く討ちる 瓢箪

二丁有る酒やへ既ち友れり 萬葉

鼻紙の中かく教えくたり括

系日くに丈夫の子さうる妻此の
 穀の子やさうる妻此の
 帳にむせく酒はく月此小松川
 痛ふとくもさす子患乃玉格
 瘡へ手と行て何くたり双
 毒くくの酒を合に小ま互
 簾さうる透くく夜ま此姑の屏風
 はあ夜へ敷りかさる妻此の
 三味線子えうへられたる妻此の
 注あ濁く味あきまなとる

三鱗
 森得
 子尻
 菊紫
 三鱗
 禁三
 千花
 白口
 妻子
 八我

控に立つ妻のつおやく女帝臨
 男目士高濃の妻根に計仕る
 宿袋とみりさるる尻知るす
 海に泣く只一瓶の響あま
 白鳥と玉子の号くぬ妻此の
 聲の音をかきよと踊りあう
 奥陸の土産に紙甲織袴の音
 紙晒ス川へ浮れ日の旅
 土着の門トへひりく三川宮

雲路
 亀毛
 妻此
 父是
 白口
 昔し
 千花
 三川
 玉丸

すめり世に病のまじきまのまはる人賣り
 菴の飯倉にいつの、焚のこり
 尾沙の鞠場へ移りけり堀れ毒
 約也と通る夜你れ移り
 愚に人知れず婦れ等れ
 園城へ通ふ如根れ掘り
 け亦日牡丹をまへ多賣れ
 こ、ま、に星の井祝く牛れ上
 的め切り張りよ壽衣を又その
 妻の終るまはこいつり手紙を
 け金
 龍長
 元春
 棧園
 水派
 新喬
 棧園
 又之
 菅妻
 三十一

まつ向のかひの涙ひ 名 人 忍 練
 建の飯焚く 猪とすけ村 大 滝
 因の猪手に 迷ふ 藪入り 百 重
 をげまうか手に力入る 琴 海 堂
 新とあひをもうが ね 惚れ 森 海
 けし 塙をもうつと 中かき 馬 海
 ふんと来る 故をいふ 吹く 傳 千 青
 うんさーとさい 籠にまゐん 鹿 万 鹿
 加傍した子に 母れおん ぎん 雲 路

あつめいさく

こらやの小僧がえへるハク

百霊

途つよひ

夜あつちがらぬ井戸ごうなり

那鉄

はぢふ

ちとれを秘をえくまり

瓢道

あひぢ

隣へ一射く心とすべくせ

那鉄

さしこも

毛をの夜ふ祈禱子うせ

那鉄

日のか

きく丁ぶ一声づきまじ

那鉄

ちぢい

るのるを思ふ存なうせ

那鉄

メこのうしぢぢ

ひんいの梅了免子控させ

那鉄

うさうせん

たなはしりく道草やへはいり

百霊

大当り

土をの概く女房化り

那鉄

まががつぢぢ

草かやの附うに首とすのここ

那鉄

一ノ草

あぢ原の目ハぬち辰を法とめ

八我

めとあだ

柴やのほま念づぶこくなり

半蓋

いりぢぢ

蛇を上下とろつ組念イ

那鉄

めりのうしぢぢ

是かと縁をへくへく通し

那鉄

芝濱松丁四丁目

収月店 早々

芝口三丁目

井キ菴 東瓶

つばき町

吾作菴 丸窓

日本橋萬町

吾斗改 雙喬菴 午叢

本町二丁目

發旭菴 錦堂

京橋かぢ町

秋山舎 夜接

既に在りて店之主折向ひて
 角目と借法と十六舎乃
 以つてめを以目し如く筆力志
 多し冊多し如く筆力志
 数筆の多きを能く全と書き
 たり何れも呼せし甲のこの
 述すやと云はむ

菅菴

天若曜
芬蘭



